

# 1967 デザイン界の歩み

## 1 行政および振興策

### IAI ソットサス とグレゴッティ 両氏を招へい

産業工芸試験所 (IAI) の昭和41年度外人意匠専門家招へい計画はイタリアから Ettore Sottsass Jr. と Vittorio Gregotti の両氏を招いて2月15日から IAI 東京本所において、イタリアのデザインにおける個性の追求と産業との関係を基本テーマとしたセミナーが行なわれた。セミナーの主な内容は、ソットサス氏がインダストリーとデザイナーの関係、オフィスにおける環境創造の経験、消費製品 (タイプライター) の経験、家具の経験、また、グレゴッティ氏は、スタイリングと消費、環境デザイン、美的経験としてのデザイン、デザイン・伝統・歴史、イタリアのデザインの歴史、デザインと伝達 (トリエンナーレの経験) の各項目によりスライドをまじえた講義と討論が行なわれた。また、同セミナーのほかには東京と大阪において両氏による講演会が開催されている。

### 海外意匠商標調 査使節団の派遣

これまでは、わが国の業者が外国のデザインを盗用して数々の問題をおこしていたが、最近では逆に外国がわが国の製品のデザイン、商標などを盗用するケースがふえてきており、とくに東南アジア方面での盗用、模倣が目立って多いことから、通産省を中心に関係機関が集まり調査使節団を送ることにきめ、2月15日から3週間にわたってタイ、香港、中華民国などを訪問し、相手国政府機関、業界団体などと、模倣、盗用防止に関する意見交換を行ない、また、各国におけるわが国製品に対する模倣の事例調査などが行なわれた。

### 第21回工業技術 連絡会議工業連 合部会

昭和42年度の工芸連合部会が5月24、25日の2日間、鳥取市の鳥取県庁大講堂において開催された。議事内容は、中央官庁指示連絡、41年度要望事項経過報告、提案事項、意匠3センター連絡事項などの一般議事のほかに、京大人文科学研究所吉田光邦助教授による「クラフトマンシップの過去と将来展望」と題する特別講演や、パネルディスカッション (テーマ: 伝統技術を背景とした輸出商品の近代工業化はいかにあるべきか)、分科会 (デザイン分科会: ①座姿勢による生体計測実施要領 ②編組加工法の呼称統一に関する基礎調査ほか。技術分科会: 木材含水率の実態調査 ②着色剤の標準化の研究ほか)、研究発表 (10テーマ) などが行なわれた。

### 東北工業技術試 験所の設立

産業工芸試験所の東北支所が同試験所から分離し、6月1日より新たに東北工業技術試験所として発足した。その設立の趣旨は、これまで東北地方は、用地、用水、労働力などにおいて恵まれた産業立地条件をもちながら、概して中小企業が多く、付加価値生産性の低い工業が大半を占め経済の後進性から脱皮しえなかった現状を是正し、この地方の産業振興、経済の発展の基盤としての技術水準の向上をはかることを目的としている。業務内容の主なもの、技術的に高度な分析測定試験と、地元地域に密着した資源の開発、有効利用などに関する試験研究などで、組織は産業工芸課、化学課、材料試験課、企画課、庶務課の5課で編成されている。

### 日本生産性本部 工業デザイン調 査団をヨーロッ パへ派遣

日本生産性本部ではかつて2回にわたってアメリカへ工業デザイン調査団を派遣したが、今回はヨーロッパへの工業デザイン調査団を派遣することを計画し、橋田貫一氏を団長とする9名の調査団を編成し、6月6日より約5週間にわたって欧州各国を訪問し、7月12日帰国した。今回の調査目的は各国の工業デザインの実態ならびにデザインの背景をなす諸要素の把握ということで、各国にあるデザイン振興機関、生産工場とその技術、デザイン事務所、市場、文化施設などを調査した。派遣先は、デンマーク、フィンランド、スウェーデン、オランダ、イギリス、西ドイツ、スイス、フランス、イタリアの各国で、調査団は、橋田貫一、服部茂夫、岩城彬、安藤光一、可知克己、松尾勝美、村上謙、中島正雄、安江賀明の9氏により編成された。

### 通産省のグッド デザイン選定

これまで年度を上期と下期に分け、年2回行なわれていたこのグッドデザイン商品選定事業は、42年度からは1回にまとめて行なうこととなり、その結果が7月29日、通産省から発表された。申請総数は272社2058点で、そのうち109社374点がGマーク商品として選定された。部門別選定数は、機器26社101点、家具14社71点、雑貨43社132点、繊維17社35点、陶磁器9社35点となっている。なお、この年から新たに品質検査が加えられ、国立検査機関、試験研究機関、検査団体など16機関によって、JIS、電気用品取締法、輸出検査法などを参考にして品質検査が行なわれた。

## 1967日本輸出デザイン展

通産省、東京都、デザイン振興協会が主催する輸出デザイン展は38年以來毎年開催されているが、第5年目を迎えた'67日本輸出デザイン展は、サブ・タイトルを「伸びゆく日本のGマーク」として、①42年度選定グッドデザイン商品②海外収集優秀デザイン商品③ロングランGマーク商品④デザイン関係機関の紹介などを展示内容として、9月5日から東京会場を皮切りに開かれたが、今回はとくに、デザインとは何か、その価値とは、そしてグッドデザイン運動というものについて、またこれから問題になると思われる環境への調和などについて、この展示会を通じてともに考えてもらうことを期待して計画された。東京会場（日本橋・高島屋）9月5日～10日、大阪会場（なんば・高島屋）10月17日～22日、名古屋会場（愛知県産業貿易館）11月1日～6日。

## 新しい学校用家具規格の説明会と製品展示会

昭和41年12月に普通教室用学校家具のJISが改正されたが、その新しいJISの改正趣旨や規格の内容を解説し、生産者と学校関係者に対する理解を深め、協力を得るための説明会が9月26、27日の東京・赤坂の日本規格協会ビルにおける東京地区説明会を皮切りに全国13地区で開催された。この説明会の講師にはこのJIS改正にたずさわった各分野の専門家が当り、それぞれの見地からの解説が行なわれ、また、同時に新JISに適合した普通教室用机、いすの実物展示（鋼製22、木製13、アルミ製3、計38点）も行なわれた。

## 第15回全国試験所展

各都道府県の公設試験研究機関の試作研究発表の場として、各試験機関の試作品、指導作品を一堂に集めてデザイン技術の交流をはかるとともに一般の批判を仰ぐ全国試験所展が10月12日～15日、東京・晴海の日本輸出雑貨センター常設展示館で開催された。会場には家具、雑貨、陶磁器などの試作、指導作品が展示され、また特別ショーとして照明器具をテーマとしたコーナーが設けられた。また、この展示会の会期中に家具、雑貨、陶磁器の各部門ごとに作品についての研修会がそれぞれ部門別に講師を招いて開催された。

## ジャパン・デザイン・ハウス

ジャパン・デザイン・ハウスでは、日本貿易振興会（JETRO）の事業の一環として、すぐれたデザイン製品の選定・展示、デザイン・インデックス・カードの整備、機関誌の発行など各種のデザイン関係事業を行なっているが、そのうちこの年に行なわれた主な展示会には次のようなものがあった。  
常設展：海外収集見本展示会（4月24日～5月2日）、海外の家具展（7月10日～18日）、優秀デザイン商品内示会（11月8日～10日）。  
特別展：自動車のデザイン展（9月4日～9日）、衛生設備のデザイン展（11月27日～12月6日）。  
臨時展：機械デザインコンクール発表展示

## 大阪デザイン・ハウス

会、輸出陶磁器デザインコンクール発表会。外国特別展示会：ルーマニア展（10月24日～11月2日）、ドミニカ展（12月13日～12月22日）。

大阪デザインハウスは1960年秋に設立されてから7年間、大阪を中心とした関西の産業デザイン振興機関として優秀デザイン商品の選定展示とその紹介あっせん、各種講演会、研究会、展示会の開催、消費者デザインサークルの運営などの振興普及活動あるいはデザイン相談、海外デザイン調査団の派遣、機関誌の編集発行などの指導調査活動を広範囲に行なっている。

優秀デザイン商品の選定は毎月1回定期的に開く審査委員会において審査選定しているがその数は年々増加しており種類も多種目にあたるようになり昭和42年度においては663点を選定した。デザイン講演会、研究会は適時開催したが、とくに外人デザイナー講演会やパッケージデザイン長期講座は好評を得た。展示会は恒例の「グッドデザインフェア」を2月に阪急百貨店で開催し選定商品約400点を展示即売し、同時に電器メーカー7社の協力を得て電気冷蔵庫のデザインアンケートが行なわれた。

デザイン調査活動の一環として行なったモントリオールデザイン調査団は1970年大阪で開かれる日本万国博をひかえて第1次34名、第2次15名と2回にわたり派遣しモントリオール博のデザイン事情を詳細に調査研究するとともにカナダ、アメリカ、メキシコのデザイン関係施設を訪問した。そのほか消費者デザイン教育として家庭婦人を主としたサークルで毎月1回テーマをきめて商品研究会や講演会を開いており、また、デザイン改善指導や内外デザイン関係機関との情報交換も強力に推進した。

## IAI・JETRO 海外留学生

IAI在外研究員：荒居廣（意匠第二部）デザインの基礎的理論体系の研究のため、42年10月16日から43年8月15日まで英国マンチェスターの Manchester College of Art and Design へ。・松尾勝央（技術第一部）表面処理技術に関する調査・研究のため、42年10月6日から43年8月6日まで米国ロスアンジェルス の Milton Weiner Laboratory へ。  
JETRO デザイン研究員：日本貿易振興会（JETRO）では、これまで滞在期間が約1年という比較的長期にわたる海外研究員を毎年派遣してきたが、42年度より派遣目的を、一定の担当業種を定めその業種に該当する品目について各国におけるデザイン傾向や消費動向などを調査することに改められ、滞在期間も約3ヵ月とすることになった。42年度はこの新しい制度による初めてのケースとして次の6氏が選ばれそれぞれ各国に派遣された。  
①井上猛（井上猛デザイン事務所）担当業種：金属製食卓用品、台所用品、派遣先：イ

タリア, 西ドイツ, ベルギー, 期間: 42. 12. 23 ~ 43. 3. 20. ②鈴木毅 (中小企業振興事業団) 担当業種: 木製食卓厨房用品, 派遣先: イタリア, 西ドイツ, ベルギー, 期間: 43. 1. 1 ~ 3. 30. ③伊東六郎 (東洋紡績) 担当業種: 室内裝飾織維製品, 派遣先: 西ドイツ, イギリス, オランダ, デンマーク, 期間: 42. 11. 30 ~ 43. 2. 27. ④島津憲右 (笠屋化学工業) 担当業種: 木, 金属食卓用品, 台所用品, 派遣先: 西ドイツ, イギリス, オランダ, イタリア, 期間: 42. 10. 9 ~ 43. 1. 6. ⑤折立幸一 (大丸) 担当業種: 家具と照明器具, 派遣先: アメリカ, 期間: 42. 10. 26 ~ 43. 1. 23. ⑥林貞正 (中部デザイン研究所) 担当業種: 陶磁器硝子製品, 派遣先: アメリカ, 期間: 42. 12. 15 ~ 43. 3. 13.

## 各種デザイン・コンクール

〔第2回日本自転車デザイン・コンクール〕  
応募総数106点, 入賞7点, 佳作10点, 奨励賞10点  
特選1席 (賞金50万円): ホーム用 (髙山毅, 船曳忠), 特選2席 (15万円) 2点: ホーム用 (加藤健二, 金子勲, 杉本功雄); ホーム用 (大倉源児), 特選3席 (5万円) 4点: ホーム用 (石原薫, 水真史朗, 和田泰吉); レジャー用 (森田茂, 村上健一); ホーム用 (福田良己); ホーム用 (佐藤進, 荒谷輝夫, 阿部行雄)。

〔第5回天童木工家具コンクール〕  
金賞, 銀賞: 該当作品なし。銅賞 (25万円) 4点: 管理職事務用家具 (フォルムグループ); 社員会議用家具 (定松潤子); 管理職事務・会議用家具 (山中玄三郎); 社員事務用家具 (古沢典子, 亀井恒男); 社員会議室用家具 (田中聡行); 社員事務用家具 (畑内靖); 管理職事務用家具 (林英光); 管理職応接用家具 (福井芳英); 社員会議用家具 (浦芝史, 北村謙一); 社員事務用家具 (青川和直)。なお金・銀賞該当作品がなかったのでその賞金は銅賞, 佳作の賞金増額に充てられた。

〔第11回雑貨デザイン・コンクール〕  
応募総数386点, 入賞19点, 入選120点。  
通産大臣賞 (買上費30万円): プラスチック玩具 '星の子供たち' (鈴木陽一), 中小企業庁長官賞 (10万円): 育児家具 (松谷忠博), 通産省繊維雑貨局長賞 (10万円): 鋳物製ガスコンロ (坪井勲), 東京都知事賞 (10万円): 調味料入れ (美甘雄三), 日本雑貨輸出センター賞 (5万円) および日本貿易振興会賞 (記念品): 組立式輪投げセット (上田正己, 上田和宏), 日本雑貨輸出センター賞 (5万円): 水筒 (嘉納敏見, 安野実, 長谷川守義, 藤井洋治, 武林進平, 可知江苑), 郵便受 (相田竜男, 土田修), 白いねこ (岩永昭子), ひつじ (赤荻陸子), 動物玩具 (中浜正夫, 中浜和子), 親子象セット (西原一), ゴミ箱 (横田勇雄, 我藤典照, 安岡潤治), ベビーカー (渡辺徹哉, 伊藤博利), 灰皿 (六角尚武), ガスコンロ (福田義男), バーベキュー・セット (畑川正之), 携帯用調理洗面台セット (石田忠昭), 水筒 (山本武人, 井村五郎, 安井敏), キッチン・バッグ (船橋靖男, 船橋尚美)。

〔第8回機械デザイン・コンクール〕  
応募総数130点, 入賞15点, 入選25点  
通産大臣賞 (副賞50万円): 8ミリ撮影機 (飯沼寛二, 高橋武彦), 東京都知事賞 (15万円): ポータブル電蓄 (福田義男, 佐久間務), 大阪府知事賞 (15万円): 掛時計 (竹場浩二), 日本機械輸出組合賞 (10万円): ポータブル電蓄 (山本善, 櫻平隆史), 日本写真機工業会賞 (5万円): 35ミリ写真機 (金子富広), 日本映画機械工業会賞 (5万円): スライド映写機 (市川祥一), 電子機械工業会賞 (5万円): カラーテレビ (山口慎一), 日本照明器具工業会賞 (5万円): 日本貿易振興会特別賞 (賞品): 照明器具 (飯田力也, 飯田道子), 日本事務機械工業会賞 (5万円): 複写機 (広瀬良次, 広瀬きよ子), 日本自転車工業会賞 (5万円): 自

転車 (石原俊彦, 羽原清明, 北村隆彦, 喜多浄), 日本時計協会賞 (5万円): 置時計 (松本光正), 日本機械デザイン・センター賞 (5万円) 4点: 置時計 (池島從孝, 伊藤島, 山田徳), テープレコーダー (夏目弘光, 清水宏, 福島正勝, 広瀬敏克), ドアホーン (小泉直矢), マイクロロビッチャー (田中央)。

〔第16回毎日工業デザイン賞〕  
応募総数139点, 入賞10点  
特選1席 (通産大臣賞状, 毎日工業デザイン賞牌, 賞金50万円): ドラフター用製図台 (安間康男, 小森康弘, 佐々木三智雄), 特選2席 (工業技術院長賞状, 毎日工業デザイン賞牌, 賞金30万円): ポータブルタイプライター (斎藤共水, 島崎尚一, 小林征治), 特選3席 (東京都知事賞状, 毎日工業デザイン賞牌, 賞金20万円): ニッポータックライター (杉本功雄), 特選3席 (大阪府知事賞状, 毎日工業デザイン賞牌, 賞金20万円): ポータブルステレオテープレコーダー (唐木正弘, 山中聡, 加賀山勝治), 特選3席 (愛知県知事賞状, 毎日工業デザイン賞牌, 賞金20万円): トヨタ家庭用ジグザグミシン (山口司, 日井多恵子, 岩山郁子), 入選 (毎日工業デザイン賞牌, 賞金10万円) 4点: ポータブルタイプライター (北村敏之, 水谷利治); アルミバブ家具 (園熙夫, 和泉満); スタンパッド (小野泰志, 西村博行); ドラフター用製図台 (中島真臣, 石井貴熙), 奨励賞 (毎日工業デザイン賞牌, 賞金5万円): 家庭用木棚 (戸谷正昭)。

〔第11回輸出陶磁器デザイン・コンクール〕  
応募総数123点, 入賞11点, 佳作10点, 入選38点  
通商産業大臣賞: カジュアルディナーウェア (児島二男, 福本康二), 中小企業庁長官賞: エッグ・ボックス (船垣太津男), 通産省貿易振興局長賞: エンボスト・ディナーウェア (筒井修, 水谷理輔), 愛知県知事賞: ディナーウェア (浅井礼二郎), 岐阜県知事賞: 黒陶 (笠井節一, 渡辺美智子), 広瀬美智子, 名古屋市賞: カジュアルウェア (河合昭), 日本陶磁器輸出組合理事長賞: 置物 (佐藤敏, 日本陶業連盟会長賞: ランプ (本間勲), 日本陶磁器意匠センター理事長賞: 壁面裝飾タイル (山田見夫), 日本陶磁器検査協会理事長賞: 朝食セット (奥村幸喜知, 水野健二), 日本貿易振興会理事長賞: 円形磁器タイル (菅原豊後)。

## 2 一般デザイン界

ディスプレイ・デザイン1966年賞  
日本ディスプレイ・デザイン協会では, ディスプレイ・デザインの向上を目的として, 全国的な規模の年度賞を設定することをきめ, その第1回として1966年賞を選び1月22日に表彰が行なわれた。今回は総数532点の作品の中からデザイナー, 建築家など22名の審査員による審査の結果, 金賞に第13回東京モーターショー会場計画が選ばれ, そのほか銀賞3点, 銅賞6点, 入選49点の作品が選ばれた。

国井喜太郎氏死去  
産業工芸試験所の初代所長国井喜太郎氏が2月15日, 老衰のため死去された。83歳。同氏は明治16年富山県高岡市に生まれ, 明治40年東京高等工業学校卒業後, 昭和3年, 仙台市

に創設された現産工試の前身である商工省工業指導所の初代所長に就任されて以来、工業の産業上における特質とその必要性を深く認識し、これを輸出の振興にも結びつけて、「工業の産業化」を広く官界、民間に説いて、今日の「産業工業」の隆盛に導いた功績は非常に大きく、また昭和18年同所を退官後も、大日本工芸会、日本美術及び工芸統制会の理事をつとめ、美術、工業の技術保存、育成に重要な役割を果たされた。昭和30年には、これらの功績を称えて第1回の毎日産業デザイン賞がおくられている。

### 第3回ディスプレイ・デザイン展

日本ディスプレイ・デザイン協会(dd協会)が主催する'67年度のディスプレイ・デザイン展が3月17日~22日まで日本橋・白木屋において開催された。今回のテーマは「ディスプレイのもつ社会的役割」で、展示作品は会員作品と公募入選作品とで構成されたが、公募作品の中から次の4作品に賞が与えられた。特選：ボーリング・ディスプレイ(田中俊行、石田洋)、奨励賞：ペーパーステッカーによるデララーヘルプのためのPOP(安藤松太郎、小林宗成)、ボールによるスクリーン・ユニット(本間一顯、小松保、福島勝子、伯耆弘嗣)、ベビー・ハンガー(高村守、永井朔、穴戸征四郎)。ほかに入選11点。

### ムライ・スツールの近代美術館のコレクションに

村井麗子氏デザインの成形合板のツール(製作・天童木工)が、ニューヨーク近代美術館の近代家具デザイン部門のコレクションに加えられることになった。このツールは第1回の天童木工デザイン・コンクール(昭和36年)の佳作に入選した作品で、現在も生産されている。

### 武蔵野美術大の「基礎デザイン学科」

武蔵野美術大学では昭和42年度より造形学部の中に新たに「基礎デザイン学科」を設け4月から開講したが、この「基礎デザイン学科」は、これまでのデザイン教育課程における前段階の訓練コースを意味する「基礎デザイン」ではなく、同大要覧にのべられているように、「デザインに関する諸領域の学問についての基礎的な把握と造形についての組織的な基礎的訓練にもとづいて、デザイン現象を分析批判し、生産や伝達のデザイン分野において新たに開発すべき諸問題を追求しようとする能力を有する人材を養成することを目標とし、デザインに関する高度の基礎理論と組織的な造形能力を身につけた新しい型の職業人育成をめざす」というこれまでになかった新しい試みで、今後の成果が大いに期待される。

### モントリオール万国博

「人間とその世界」をテーマとするEXPO'67はカナダ・モントリオール市において4月28日から10月30日まで6カ月間にわたって開催された。会場は市の中心を流れるセントローレンス川をはさみ、ハーバーシティ、セントヘレナ、

ノートルダム3地区およそ32万平方メートルがあたり、参加国62カ国のパビリオンを含めたバラエティに富んだ建築群、それぞれ趣向をこらした展示によってにぎやかに開催され、会期中に予想をはるかに越えた5,000万人の入場者を受けて盛況裡に10月末閉幕した。会場建築では、この万国博のモニュメントである、イスラエル人モーシェ・サフジェの設計による実験住宅「アビタ'67」、半透明のプラスチックをちりばめた直径75メートルのプラードームのアメリカ館、8本のマストを立てて金網を支え、その下にプラスチックシートを張った巨大なテント張り構造の西ドイツ館などが人目をひき、また、最も人気を集めたといわれるチェコ館は、同国の世界にはこるボヘミアングラスの巧みな展示とともに、70~80センチの正方形のスクリーンをモザイク風に150数個はめ込み、しかもそれが前後に動くというマルチ・スクリーンによる映写、さらには観客の多数決によってストーリーの結末を選ばせる映画など卓抜なアイデアで入場者を魅了したが、このチェコ館にかぎらず、他のパビリオンでも映画手法を利用した展示が数多くみられ、それぞれ効果をあげていたことが今回の万国博の展示の特徴といえるもので、70年の日本万博の展示に大きな影響を与えるのではないかとと思われる。

### 大阪デザイン・ハウス賞'67

大阪デザイン・ハウスでは、同ハウスの年間選定品の中から最もすぐれた製品に対して年度賞を与えて表彰しているが、第7回になる'67年度賞には次の4点の製品が選ばれた。書斎ユニット(出品：岡村製作所、デザイン：GKインダストリアル・デザイン研究所)、ハイコンバクト・ステレオ(出品、デザイン：パイオニア)、エンジンG-25シリーズ(出品、デザイン：本田技研)、うのふ切立湯呑(出品：高島屋、デザイン：日本産業工業)。

### ジョ・ボンテイ来日

建築家、デザイナーとして著名なイタリアのジョ・ボンテイが夫人とともにオーストラリアへの旅行の帰途、6月6日から9日まで日本に立ち寄った。短い期間だったが、桂離宮の見学、政府関係者とのデザイン問題についての懇談会、そして8日には早大において「現代は建築にとって重要である」と題して講演をするなど76歳という年にはみえぬ精力的な活動ぶりをみせて次の旅行地に旅立っていった。

### 第2回クラフトセンター賞

すぐれたクラフト製品を選定、展示している丸善・クラフトセンタージャパンが、その年間選定品の中からさらに優秀作品を選ぶクラフトセンター賞の第2回受賞作品が6月に発表され、6月19日~24日に開かれた'67秀作展に併せて紹介展示された。受賞作品は次のとおり。金賞：該当作品なし。銀賞1席：クリスタル小鉢セット(河合祥子)、第2席：拭漆盛鉢(大西長利)、第3席：鉄鍋、鉄オイル

パン（鈴木千代子）、第4席：土瓶（岡本榮司）、第5席：クリスタル置物（渡辺友季子）、第6席：格子鍋敷（日本輸出木工）。

#### ’67日本ニュークラフト展

日本デザイナー・クラフトマン協会が主催する’67日本ニュークラフト展が6月23日～28日まで東京銀座・松屋において開催された。この展示会は昭和35年以来毎年開かれているもので、今回も一般から公募した作品を審査選定したものに審査員の作品を加えた約200品目の作品が展示された。今回のニュークラフト賞・松屋賞は、盛器（コロナA、B）小松誠と花蒔（掛川三帖）：田中忠興。

#### ハーマン・ミラー家具の国産化

イームズやネルソンの家具を生産しているハーマン・ミラー社（米）の製品をわが国に輸入、販売しているモダン・ファニチャー・セールス社がかねてから準備をすすめていたハーマン・ミラー社製品の国産化が実現した。ちょうど1年前に同じくアメリカのノル社の製品を国際インテリア社が国産化して話題となったのと同様に、このハーマン・ミラーの場合も、アメリカ製品と比較して質的にどの程度再現しうるか、そして価格がどのくらい下がるかが関心の的であった。発表されたものは国産化の第一次計画によるもので全品目の約80%を生産可能にしたといわれ、逐次計画を進めて全品目を国産化する予定とのことであるが、発表された製品は、プラスチックの椅子のレザー張りに少々難点が見受けられたが総体的にアメリカ製品とほとんど変わらないといってよいほどのできばえで、また、価格の点も、例えばイームズの合板椅子が22,400円から15,000円と下がり、ものによっては5割も安くなり、大分買いやすい値段となっているので、この点でもこの企画は成功したものといえよう。

#### 日宣美の組織改革

日本宣伝美術会は8月に開催された第17回の日宣美展会期中に総会を開き組織の改正を行った。その内容はこれまでの組織が各地区別支部から成り立っており、中央委員会も各支部の代表委員によって構成されていたのを、全国的な統一化をはかり、中央委員会も全国の会員による選挙によって選出された15名の委員によって構成し、会の運営のすべての決定権をこの新中央委員会にゆだねることに改められた。改正の理由はこれまでの組織が17年前の日宣美創立以来のままであり、啓蒙期にあった当時としては、それなりの実効性のある組織であったが、その時期をすぎ実践期にある現在、多様な社会の動きに対応しうるような体制に切りかえる必要があることから今回の措置がとられたものである。会の事業も、これまでの日宣美展以外に研究会、機関誌の発行などの活動を強化してゆく方針を表明しており、体制改革の行なわれた日宣美の今後の動向が注目される。なお新たに選出された中央委員のメンバーは亀倉雄策、山

中一光、早川良雄、原弘、河野鷹思、大橋正、永井一正、山城隆一、栗津深、伊藤憲治、栗谷川健一、西島伊三雄、細谷巖、勝井三雄、板橋義夫の各氏。

#### 日野コンテッサが3年連続名誉大賞受賞

日野自動車のコンテッサ1300クーペが、ベルギーで行なわれた第4回サンミッシェル自動車エレガンス・コンクールで名誉大賞を受賞した。これで65年イタリア、66年オランダと3年連続大賞を得たことになる。このコンクールはスタイリング、安全性など自動車に要求される部分すべてについて審査するコンクールで、今回はジャガー、ロータス、ベント、アルファロメオなども参加している。

#### 自動車デザイン展

日本貿易振興会（JETRO）のデザインハウスが9月4日～9日まで‘自動車デザイン展’を開催した。展示会の内容は、国産車のデザイン・ポリシーとデザイン・プロセスを中心としたもので、統計、グラフ類による自動車産業の現状、トヨタ自動車におけるAA型車から2000GTにいたるまでのスタイルの上からのポリシーと研究開発の進め方をスケールモデル、スピード・シェーブなどで示し、また日産自動車からは新ブルーバードを例にとったデザイン・プロセスを克明に説明し、フルサイズ・モデルまで搬入してその誕生の過程を展示していた。この展示会はこれまで企業内の秘密事項であった自動車デザインについての展示ということで、デザイナーにとっても興味ある催しであったが、デザイン・ハウスはじまって以来といわれる非常な盛況ぶり、一般の人たちの自動車に寄せる関心の深さを示す一例でもあった。

#### 第4回日本パッケージデザイン協会展

第4回日本パッケージデザイン協会展が、9月22日～27日まで東京会場（新宿・京王百貨店）、10月12日～14日、大阪会場（電通大阪支社）で開かれた。展示内容は会員作品と一般公募作品で、公募作品は前回の約2倍の218点が寄せられたが、選考の結果38点が入選とし展示された。受賞作品は次のとおり。JPDA賞（技術会員）：洋酒容器‘MAGアベック’のデザイン（淡島雅吉、グラフィック・秋月繁）、JPDA賞（一般公募）：ピスケットのパッケージ（高橋悦夫）、特選（一般公募）：ピッコロ（北川佳子）：レコード・ジャケット（有田公彦）、ほかに奨励賞（一般公募）2点、特賞（会社会員）2点。

#### ICSID総会と国際デザイン会議

国際工業デザイン協議会（ICSID）の第5回総会と国際デザイン会議が9月11日から15日までの間、カナダ連邦結成100年とEXPO’67で賑わうオタワとモントリオールにおいて開催された。

総会はオタワ市の国会議事堂の一翼にある会議場において9月11日から12日午前中開催され、事業計画の決定、会計報告、加盟申請団体の承認、会員除籍・資格変更、役員選挙、

次期開催地の決定などが上程された。その結果、新規加盟国として、オーストラリア、ブルガリア、中華民国、チェコスロバキア、ノルウェー、東ドイツ、スイス、メキシコの7ヵ国7団体が正式会員団体として加入が認められ、また、次期開催国は、1969年第6回大会がイギリス、1971年第7回大会はスペインと決定し、また役員の変更も行なわれた。国際デザイン会議はモントリオールの万国博会場内のカナダ・デュボン講堂において9月13日から15日まで開かれたが、今回のテーマは「Man to man」で、それぞれ次のサブ・テーマと講演者によって討議会が行なわれた。第1日 テーマ：Man-His need and his wants, 講演者：Ashley Montagu (人類社会生物学者), 司会：Ralph Caplan (デザイン評論家, 前インダストリアル・デザイン誌編集主幹)。第2日 テーマ：Man-His understanding 講演者：Daniel Cappon (実験精神病学医学者), 司会：Allan R. Fleming (グラフィック・デザイナー)。第3日 テーマ：Man-His capacities 講演者：Jacob Bronowski (数学者), 司会：Misha Black (イギリス王立芸術大学教授)。この討議会は生物学者、精神医学者、数学者という異色の登壇者が選ばれたが、それぞれユニークな講演内容と巧みな司会ぶりによって参会者に深い感銘を与えたようである。

なお、今回のこの総会、国際会議には、わが国からは小池新二、吉岡道隆の両氏が代表として出席され、また、吉岡氏はシラキュースで開かれたICSID教育委員会にも出席されている。

#### ジャパン・ファニチャー・センター開館

わが国の家具取引のための共同市場として建設がすすめられていたジャパン・ファニチャー・センター (JFC) が9月13日開館した。このJFCビルは東京湾海に地上8階、地下1階、延11,317m<sup>2</sup>のJFC専用ビルで、全階にわたって同センター会員のメーカー、問屋の展示場が設けられ、商品を常時展示して家具の販売促進、流通の円滑化をはかるという、本格的な家具マートで、このJFCには国内家具の約60%を生産している約210社のメーカー、問屋が加入している。

#### JIDA '67 デザイン会議

JIDA 主催の '67 デザイン会議が9月28、29日の両日東京上野の文化会館において開催された。今年度の会議は「インダストリアル・デザインの有効性について」をメインテーマとしているが、これは、めまぐるしく変貌するIDの活動背景の中では、かつてのデザイン理念はもはや、そのまま踏襲できなくなっているのではないかと、現代社会におけるIDの有効性を再検討することによって、新しい理念、方法を求める手がかりとしようとするもので、「IDと市民生活の変貌」と「IDと企業の進化」の2つのサブ・テーマに分けて、使用者と生産者側というIDのも

つ両側面からの掘り下げが企図された。会議は下記のような内容によるシンポジウムとパネルディスカッションが行なわれたが、これらに先立ち小池岩太郎氏の基調講演と「生活の近代化とは」と題して今和次郎氏の記念講演が行なわれた。

「シンポジウム：IDと市民生活の変貌」 乗りものデザイン論：木村一夫 / 家庭電化デザイン論：白井良和 / 家具デザイン論：山本敏郎 / 公共デザイン論：西沢健 / 司会：寿美田与一。〔シンポジウム・IDと企業の進化〕 企画デザイン論：大和田稔 / 開発デザイン論：曾根靖史 / 商品デザイン論：西脇凡夫 / 生産デザイン論：篠原宏 / 司会：宮島久七。

〔パネルディスカッション：IDの有効性について〕 パネリスト：木村一夫、白井良和、山本敏郎、西沢健、大和田稔、曾根靖史、西脇凡夫、篠原宏 / 司会とまとめ：金子至。

なお、JIDA では研究会委員会の主催による公開研究会、講演会を開催したが67年度のテーマと講師は次のとおり。2月17日<住居における建築・インテリア・IDの調和はいかにあるべきか>パネリスト：辻野純徳、杉山高嗣、勝又研一、モデレーター：多田愛実。6月15日<IDの決め手>パネリスト：小杉二郎、豊口克平、小池岩太郎、モデレーター：佐々木達三。7月12日<IDによる個人の肉体的な利益→IDはいかに人体を美しく創作するか>中尾喜保。7月27日<IDによる個人の精神的な利益→道具世界への導入>栄久庵憲司。8月9日<IDによる個人の経済的な利益>泉真也。8月24日<IDによる個人の利益>小塚新一郎。9月7日<IDによる文化的社会的な構成>山本学治。9月20日<IDによる環境形成への役割>栗津潔。10月12日<IDからみた経済社会の発達>黒瀬英雄。10月31日<IDによる新製品開発への貢献>柴田献一。11月17日<IDによる経済社会の利益>林雄二郎。11月30日<IDによる製造技術への刺激>森政弘。12月21日<IDによる販売政策の変貌>大賀典雄。

#### ドイツ・デザイン展

日本デザイン・コミッティが主催するドイツ・デザイン展が11月10日から15日まで東京銀座・松屋において開催された。この展示会は一昨年同コミッティが主催したイタリア・デザイン展に続く第2回目の国際展として催されたもので、内容は現代ドイツを代表する工業デザイン (カメラ、測定機器、家庭機器、音響機器、小型工作機械、照明器具、陶磁器、ステンレスなどの食器類、家具、繊維製品など)、グラフィック・デザイン (主としてポスター類) ならびにドイツ・デザイン教育の紹介として、国立カッセル工芸大学 (視覚伝達、工業デザイン、建築とインテリア・デザイン、壁画の各科がある) の作品、とくにその創造力養成の基礎的訓練過程を中心とする展示とスライドによる作品紹介など全体を通

じてドイツ民族のもつ堅実で合理的な冷静さを感じさせる内容の豊かな展示会であった。

#### 日本ディスプレイ・プロデューサー協議会の設立

日本ディスプレイ・プロデューサー協議会の創立総会が11月11日東京商工会議所において約100名の関係者をお集り行なわれた。この団体は最近とみに重要性を加えながら、大規模化、高度化しつつあるスペース・メディアとしてのディスプレイのプロデューサー・システムの確立を期すことによって、従来よりはるかに広汎な視野と高度の知識、技術を確立しようとして創立されたもので、現在のところプロデューサーたりうる人材約50名によって構成されている。事業計画としては、研究会、シンポジウム、パネルディスカッション、講演会などを行なうことによってディスプレイに関する多角的な知識の高揚をはかることがすすめられている。なお、創立総会において、委員長に浜口隆一、委員に豊口克平、高村英也、上田健一の各氏を選出された。(デザイン No. 105)

#### 日本デザイン学会14回大会

昭和42年度の日デザイン学会大会が11月18、19日の2日間、仙台市宮城県民会館で開催された。第1日は34テーマの研究発表と総会が行なわれ、総会においては、提出された支部規約原案を再検討することなどが決められ、また次々回の大会を九州地区で行なうことが内定された。第2日には、チャールズ・イームズの映画「玩具とリズム」と、勝見勝<近代デザインの傾向と問題点>、安倍郁二<東北地方における環境と工芸について>の両氏による記念講演が行なわれた。

#### 第13回毎日産業デザイン賞

毎日新聞社では毎年その年におけるすぐれたデザイン活動に対して毎日産業デザイン賞をおくりこれを表彰しているが、第13回日の'67年度は、渡辺力(紙製家具と卓上電気置時計などの開発)と、伊藤隆道(資生堂ウィンドーディスプレイなど一連の展示構成)の両氏を選ばれ、また、デザイン特別賞には、国際国内にわたる15年間のデザイン運動推進の功によって、日本デザイン・コミッティが選ばれた。なお最終候補作品は次の7点である。  
①松屋のグッドデザインコーナーを中心とするもの②ダンボール玩具を開発したQデザイナーズ③大橋正イラストレーション展④ソニー会館のウィンドーディスプレイ⑤べんてるのサインペン⑥日本デザインコミッティ⑦伊藤隆道のウィンドー展示構成。

#### 帝国ホテル取こわしはじまる

ライトの設計で有名な東京・帝国ホテル旧館が老朽し使用に耐えなくなったためこれを取りこわし、新たに超高層の新ホテルを建設するという計画が発表され内外に大きな反響を呼んだ。計画発表後ライトの代表的な作品であるこの建物を惜しむ声次第に高まり、「帝国ホテルを守る会」まで結成され、また、はるばるアメリカからライト夫人まで来日して

保存要請をするなど、熱心な保存運動が展開されたが、結局、ホテルの営業面の問題もあって取りこわしが決定し現地保存は不可能となった。また、全館移築も期間、費用の点でこれもためて、結局、正面ロビーなどの一部を愛知県犬山の明治村へ移築されることになり、12月1日から解体が開始され、大正11年開設以来45年間、関東大震災、東京空襲にも耐えてきた帝国ホテルもその幕をとじた。

#### 万国博デザイン顧問きまる

1970年の大阪万国博のデザイン顧問に勝見勝、小池岩太郎、田中千代、真野善一、浜口隆一の5氏が選ばれた。この顧問団の仕事としては①日本万国博のデザインに対する基本方針、計画策定②万国博協会とデザイン関係団体との協力体制の推進③その他デザイン上の諸問題についての調査などを行なうことになっている。

#### 日本デザイン・コミッティ

日本デザイン・コミッティは発足以来、東京銀座松屋のグッドデザインコーナーの運営に当たっているが、1964年同イベントの増築新装を機に設けられたギャラリーにおいて、毎月小規模のデザイン展を開いており関係者の好評を得ているが、この年もつぎのような内容の展示会を開催した。

デザイン・ギャラリー展：第33回(1月～2月)「河野鷹思のさかな」(担当・河野鷹思)、第34回(2月～3月)「絵地図」(担当・勝見勝)、第35回(3月～4月)「おとなのおもちゃ」(担当・剣持勇)、第36回(4月～5月)「紙を生かした印刷デザイン」(担当・原弘)、第37回(5月～6月)「構造デザイナー／ヘンリー・カン」(担当・勝見勝)、第38回(6月～7月)「ピントーリ作品展」(担当・亀倉雄策)、第39回(7月～8月)「ドムス展」(担当・松村勝男)、第40回(8月～9月)「つぎ手と道具展」(担当・清家清)、第41回(9月～10月)「自費発行のポスター展・外国のポスター展」第42回(11月)「メイドイン・ジャパソンの①」(担当・勝見勝)、第43回展(12月～43年1月)「ロープ・ワーク」(担当・清家清)。また、グッドデザイン展は国内公募展と外国展とを交互に開いているが、今年は外国展の年にあたり、11月に「現代ドイツデザイン展」(別項)を開催した。

#### ジャパン・クラフトセンター

クラフトセンターでは、最近とみに高まったクラフトに対する関心に対応し、地方へのクラフト啓蒙を目的に、関西、北海道の両地区に同センターの常設展示場を新設することになり、8月に京都(中京区河原町蛸薬師上丸善ビル)、12月に札幌(南一条西三丸善ビル)にそれぞれ開設された。また、この年間センターで催した主な行事は次のとおり。デザイン系大学生とクラフトセンターのメンバーによる「クラフト討論会」・4月26日／クラフトセンター賞の発表ならびに授賞式・6月20日／センター賞受賞作品および候補作

品を集めた「今日のクラフト'67秀作展」東京会場・6月19日～24日、名古屋会場・6月26日～7月1日／中京地区のクラフトマン、メーカーの新作紹介展「中京のクラフト展」5月15日～20日／秋田県内のクラフトメーカーの新作を集めた「秋田のクラフト展」11月13日～18日／若手クラフトマンを招待した新人展「'67今日のクラフト展」11月13日～18日／京都新陶人グループの新作、京都市クラフトセンターの選定品などを集めた「'67新作クラフト展」を京都の新設展示場で開催・11月26日～12月1日。

### 3 産 業 界

#### IC 化製品出回る

1966年から本格的に生産が開始されはじめたIC（集積回路）はこの年に入って各種の電子機器に導入され、いわゆる「IC化」製品が次々と発表され市販された。IC化の対象となった製品は、コンピューターをはじめ、通信機器、卓上電子計算機、ラジオ、ステレオ、テレビ、補聴器などで、中にはほとんどIC化されたという製品も発表された。このように各電子メーカーがIC化製品の開発にのり出したのは、信頼性の高いICの採用によって製品の品質向上に役立ち、小型化もでき、さらにはんだ付けなど作業工程の減少、「IC化製品」というセールスポイントがえられるなどのメリットがあげられるが、一方では、IC化商品を開発することによってこれからのIC時代の本格化に備えて技術を蓄積しておく必要があるからという見方もある。また、IC自体の技術開発も進んでおり、新しい構造、製法が次々と登場しており、ICの次の段階であるLSI（ICの個別部品の集積度をさらに高めた大規模集積回路）もすでに完成し、さらにはこのLSIの概念とは異なる異種大規模集積回路（IEC）が開発されたといわれており、IC技術の進歩の度合はきわめて早く、電子機器業界の大きな関心事の一つとなっている。

#### カラーテレビと白黒テレビ

“前年（66年）末からの通産省の値下げ要請、公正取引委員会からの価格協定破棄勧告、一部百貨店での安売りなど一連の騒動で消費者が買い控えに出て荷動きの鈍ったカラーテレビは、年明け後、三洋電機に続いて東芝も16万7千円の19型普及品を発表、早くも値下げ路線へばく進することになった。……（日経1.27）とこの年のはじめに報道されたが、カラーテレビがこれまでおよそ2年間ほとんど

値下がりが続いたのが、3月に三洋の16万円台の19型普及型発売が値下げの口火となり各社きそって普及型を発表し、新規発表ごとに価格が徐々に下り、7月にはとうとう19型15万円台、16型13万円台、15型12万円台まで下がった。売れゆきも春から夏にかけての値下がりにつれてのびつつあったが、夏のボーナス期を境に急激に売れはじめ11月末現在で70万台も売れ、年度当初の年間販売予想の50万台を軽く突破し、普及台数も100万台を越えた。この予想外の人気は、所得水準向上、カラー番組の増設、テレビの性能向上、19型の普及型や16、15型が売れ出され価格が下がったことなどにその理由が集約されると思われるが、結局年末までにはおよそ90万台と予想の2倍近くを売り、普及率も前年末1.7%を一躍5%台にのせた。白黒テレビの場合、普及台数が100万台を越えたとき爆発的に普及しはじめたといわれるが、カラーの場合はどんな形で普及が進んでゆか興味あるところである。一方、白黒テレビは相変わらずの売れゆきを示したが、機種別の需要ではこれまでの19型中心から12型以下のトランジスタテレビに人気が行きしその売れゆきが伸びたのが一つの特徴といえようである。これはカラーテレビの購入を予想して買いかえるときに小型テレビを望む家庭がふえたため、ある家電メーカーの調査でも12型が小さすぎることはない、との結果が出ており、各社とも白黒テレビの生産に力を入れはじめ、ICを組込んだり、画面に暗黒色ガラスをつけて見やすくしたりして、品質向上に力を入れていた。

#### ルームクーラー

新三種の神器、つまり3C（カー、カラーテレビ、クーラー）の一つであるクーラーは春から夏にかけて家庭用の需要が激増し、年度はじめの予想20万台を30%も上回る28万台も売れ、普及率も3%に上りメーカーをよろこばせた。この年のクーラーの特徴は、一般家庭の需要を見越して各社とも8万円前後の普及型を発売したこと、デザイン、性能の面では木目パネルの採用など家具調デザインの機種が増えたこと、また、小型、軽量化も促進され、防音構造付の機種あるいは音の大きいコンプレッサー部と冷却部を分離したセパレート型など家庭を対象とした機種が台頭が目立った。業界ではこの夏の需要が予想外に多かったことから次年度は大幅の需要増を見込み、各社とも秋から暮にかけて新型機種の発表を行ない活発な商戦を展開した。とくに年末にはアメリカGE社の日本代理店が、30万円以上のクーラー購入者に対しカラーテレビを贈るといった販売策が発表されて話題を呼んだ。

#### 音楽テープの台頭

これまでレコードが中心だった音楽産業に新たにテープという新しい媒体が加わり、各社きそってこの分野に進出しはじめた。



これまでも普通のテープに音楽を録音した音楽テープは市販されていたが、2、3年前から製品化されはじめたカートリッジあるいはカセット式と称する小型で操作が簡便なテープの登場により、音楽をあらかじめ録音した音楽テープがこれまでのレコードの分野に食い込みはじめ、レコード各社もこの部門への進出に本腰を入れはじめたもので、すでにこのカセット式テープ専用の再生装置の市販が開始されている。

とくにこの分野で顕著な動きを示したのは、自動車用のカーステレオで、小型のカートリッジ式テープをプレーヤーに差込むだけで音楽が再生できるという、自動車用にうってつけの装置であることからオーナードライバー層の人気を呼びこの年に入って需要が急増し、メーカーもこれまで4社だったのが一挙に10数社に増え、各社入りみだれて販売戦を展開した。このカーステレオには8トラック4チャンネル用と、4トラック2チャンネル用の2種があり、ボタンを押すだけで前者が4種、後者が2種の音楽が選択でき、ともにテープがエンドレスになっているステレオプレーヤーで、ラジオと異り雑音が少なく音質が良い上、取扱いが簡単なことから今後ますます需要が増えるものとみられている。価格は3万円前後。

## 自動車の話題

1967年の自動車界はモータリゼーションの進展にもなつて生産、販売ともにこれまでの最高を記録し、とくに生産量ではアメリカに次いで世界第2位に進出した。ちなみに、生産台数での世界ランキングを紹介すると、第1位アメリカ、次いで日本、西ドイツ、フランス、イギリス、イタリアと続いている。製品の話として最も大きなものは、本田技研のホンダ N360 軽乗用車が発売後数ヵ月でたちまち月間販売量が他車を追いぬぎトップに立つという驚異的な躍進ぶりであり、業界一般ともに驚きの目をみはったものであった。また東洋工業の多年の研究開発が実って、ロータリーエンジンを積んだマツダ・コスモがついに市販され、その評価を世に問うことになったのも話題の一つといえよう。また、この年の新型乗用車は、新種車では、トヨタ・センチュリー、いすゞ・フローリアン、フル・モデルチェンジしたものに日産ブルーバード、トヨタ・クラウン、プリンス・グロリア、スズキ・フロント 360、マツダ・ファミリアなどで、例年ないニューモデルの出現ぶりが目立った。そのうちマツダ・ファミリアが装飾的付属品がついていない「オリジナル」タイプを36万8千円という低い価格で発売し、付属品はオプションとして各種用意しておきユーザーの好みに応じて選択させるという新しい販売上の方向を示したことが注目された。これはアメリカの Mustang が同様の販売策で成功したといわれ、その影響を受けたものとも思われるが、理由はとも

あれ、これまでのお仕着せのなみのから、豊富なオプションによるバラエティのある組合せ仕様を選ぶことは一つの進歩であるとして、賛意を示すむきが多かった。

## 資本自由化

かねてから懸案になっていたわが国の資本自由化が7月1日から実施され、産業ははじめ各業界はいよいよ国際化へふみ出すことになった。自由化業種は第1類（外資比率50%まで自動認可）33業種、第2類（外資比率100%まで自動認可）17業種の計50業種が決定し、100%自由化業種では普通鋼、自動二輪車、合成繊維、ビールなど、50%自由化業種にはラジオ、テレビ（カラーを除く）などの電気機器、カメラ、時計などが含まれており、いずれも欧米諸国にひけをとらない国際競争力のある産業、あるいは外資の進出の魅力に乏しいと判断された業種が選ばれている。

なお、この自由化後の新しい方針に沿った合弁会社の設立第一号として、12月にソニーと米国 CBC とによるレコード会社（出資比率50対50）の申請が行なわれた。

## ボンド切下げ

英国政府は11月19日ボンド平価を14.3%切下げ、対ドルレートを2ドル80セントから2ドル40セント（1ボンド：864円）に切下げるとともに公定歩合を8%（従来は6.5%）に引上げると発表し直ちに実施した。

かねてから英国経済は労働不足と物価上昇による輸出不振・輸入増大による国際収支の慢性赤字を続けており、この年に入って2回も公定歩合を引上げて需要の抑制をはかったが、輸出競争力の強化以外に改善の方法がないとして今回の措置となったもので、わが国への影響は、これまでたびたびボンド危機が伝えられていたため輸出企業は早くから安全策を講じていたため直接的な被害は比較的少なかったといわれる。

## 家庭用電気機器の普及率

日本電機工業会が42年7月1日現在でまとめたわが国の家庭用電気製品の普及率は次のとおりで、前年に引続き電気冷蔵庫が6.8%増と相変らず高い増加率を示し、次いで扇風機、電気掃除機が5%台でこれに続いている。（カッコ内は41年7月1日現在の普及率）。

電気アイロン：84.7%（84.0）、電気洗濯機：69.3%（65.8）、扇風機：64.7%（59.1）、電気こたつ：61.7%（57.8）、電気冷蔵庫：62.1%（55.3）、電気釜：55.5%（54.7）、電気あんか：35.9%（35.3）、電気掃除機：39.4%（34.0）、電気ストーブ：10.9%（9.7）、電気毛布：7.9%（5.0）。

## 製品の話

厚さ5センチのブラウン管：〔その一〕早川電機が厚さ5センチの平面ブラウン管の試作に成功した。これまでのブラウン管が後方においた電子銃から電子ビームを放射して正面のけい光面を受けとら画像を作るのに対し、これは電子銃を下方におき、ブラウン管の後

方にある偏光電極によって垂直走査方式でけい光面に画像を作るもので、発表された試作品は8型のものだが、厚さが約5センチとこれまでのブラウン管（8型で18~20センチ）の $\frac{1}{2}$ ~ $\frac{1}{4}$ になり、また、透明な偏向電極を使うと表裏両面に画像をうつすことができるので、超薄型とともに新しい用途も考えられている。

〔その二〕 もう一つの薄型ブラウン管は、11月に東芝が発表した偏平ブラウン管で、これは電子銃が横方向に付いている6型のもので、厚さがこれも5センチと薄い。原理はけい光面を円筒面にしてその延長上に偏光中心がくるようにしたもので、偏向コイルの位置に新しいアイデアが採用されている。これは偏向回路が従来のもと同じである上、消費電力が少ないので電池を電源とするポータブル用に適しており、技術的な面でも実用性のあるものとみられている。

**1インチ・テレビ**：大きさが幅4.3×高さ7.5×奥行18.8センチ、重さ900グラムという超小型の白黒テレビがソニーから発表された。あらゆる部品を小型化し、回路部分に大幅にICを採用して小型化をはかったもので、画面が小さすぎるという点はあるが、前項の薄型ブラウン管の開発と考え合わせると本格的なポケットテレビの実現も間近いことを思わせる。

**電子レンジの話題**：極超短波を利用する電子レンジは数年前から商品化されているが価格が高いため一般家庭へはほとんど普及せず、料理店、ホテルなどの業務用が主な需要先だった。ところがこの電子レンジの中心部品であるマグネトロンの特許が7月に切れたことから、各電機メーカーがその生産に本腰を入れはじめ、10月には早くも三洋電機から16万9千円とこれまでより5万円安い機種を発売し、他社も新機種開発の準備を進めていることから、今後、低廉な家庭用電子レンジの発売が期待できそうである。

**ポータブル電気洗濯機**：最近の少人数家族の増加、独身生活者の都市流入増加、住宅事情などを考慮して企画された小型洗濯機が三洋電機から売り出された。この洗濯機はポリプロピレン製の水槽と本体が簡単に取付、取はずしができるもので、機能は普通の洗濯機とほとんどかわらない。洗濯容量は1キロ、大きさは幅42×高さ56.8×奥行44.4センチ、重さ5.1キロで、未使用時には水槽と本体を分離しどこにでも収納することができる。9,500円。

**四弗化樹脂塗装**：2年ほど前から四弗化樹脂を塗付したこげつけないフライパンが現われ、主婦の人気を呼んでいたが、この樹脂で加工した電気釜、皿、アイロン、家具用キャスターなどの製品が市場に出はじめた。四弗化樹脂は最近急速に開発の進んだ耐熱合成樹脂の一種で、これを特殊な技術でアルミなど

の表面に密着させると耐摩耗性に富み、摩擦係数の極めて小さい表面がつくられるものである。

**場所をとらない給湯ボイラー**：幅25×奥行25×高さ200センチという細長い給湯暖房器が発売された。これは燃焼部分、熱交換部分、煙突部分を縦長に構成して塔状のボイラーにまとめたもので、場所をとらないので一般家庭や医院やレストランなどにむいている。燃料は灯油、軽油を使い、性能は最大出力20,000kcal/h、連続出湯量25℃：800l/h、50℃：400l/h。東洋空気が調製、115,000円。

**コンパスのいらぬ円弧ゲージ**：このゲージはスライド式のゲージの目盛りを合わせるとスチール製の帯鋼が任意の円弧を画くもので画ける範囲は半径20センチから2メートルまでで誤差は1万分の1という。円弧を画くだけでなく、すでにできているトンネルなどの半径の測定にも利用できる。巴製作所製、17,000円。

**テレビ電話**：相手の顔を見ながら電話ができるテレビ電話「ビデオホン・システム」を日本電気が発売した。ブラウン管の大きさは6型と9型の2種があり、これに交換装置と中継装置とでシステムが構成され、離れた建物間の中継はレーザー通信で行われる。なお、この電話は電電公社の局線とは接続できない、内線だけのものだが、とにかく長年の夢が実現したわけである。価格は1回線当り約45万円。

**段ボールのキャビネット**：イージャーキャビネットと称する特殊段ボールで作られたファイリング・キャビネットが年末に売り出された。普通のファイリングキャビネットの1段分の大きさで、スチールプレートで補強してあり積重ねができ、またジョイント金具により横にも組み合わせることもできる。普段あまり使わない資料や保存資料の保管に便利。セネラル社製、950円。

**マツダ・コスモトヨタ2000GT市販**：東洋工業が昭和36年以来西独NSU社とバンケル社と提携して実用化をはかっていたロータリーエンジンを搭載したマツダコスモスポーツが5月に発売された。この車は単室491cc 2ローター、110馬力のエンジンを装備し、最高速度185キロ、SS4分1マイル16.3秒という高性能をもち、価格は148万円。

また、1966年に数々の世界記録を樹立したトヨタ2000GTも市販をはじめた。トヨタ自動車とヤマハ発動機が技術提携して開発した車で、3連キャブレター付6気筒2000cc、150馬力、前進5段のミッション、最高速度220キロ、SS4分1マイル15.8秒の国際水準をゆくGTカーで、スタイルから部品まですべて純国産技術で開発されたもの。価格は東京渡して238万5千円。